

貧乏訳者 自力で賞金を稼ぐ…



東江一紀

ひと月ほどのあいだに、大きな変化が次々に起こって、足に血がつかない、じゃなくて、地に足がつかない日々が続いております。

まず、経済的なことが大きいかな。いえ、いえ、大金持ちになったというわけではあります。このところ、日銭の稼げない大部のハードカバーばかり訳していたので、ずっと

綱渡りのような生活を余儀なくされていたのだが、自己最多のページ数となった分厚い上下二巻本がなぜか好調で、毎月少しずつ増刷され、まるで月給みたいに印税が入ってくるようになった。

ベストセラーまで行かなくても、この程度の小ヒットがときどきあれば、自主懲役など

しなくてもすむのである。なにも、わたし、好きこのんで囚人をやっているわけじゃない。版元からの催促と家計の逼迫という二大条件が、ここ数年、常に満たされていたからこそ、年中無休の一日十五時間労働をみずから強いてきたのだ。

そう、わたし、編集者にせっつかれたぐらいで、せっせと仕事に励むような扱いやすいタマではない（この部分、××書房と○○文庫と▲書店と□□出版と★文社の担当諸氏に聞こえないよう、小さな声で読んでくださいいね）。今までは、要するに、生活に追われていただけだ。

経済の枷から解き放たれたときのわたしは、からきし強いぞ（なんのこっちゃ）。あしたでできることはきょうやらないというのが、そもそもわたしの基本方針なのだ。

というわけで、これが最後のご奉公とばかりに、夏休みなしの地獄のような夏を過ごし、東京某元社の仕事をわずか二十一月遅れで脱稿したあと、わたし、とうとう自主恩赦に踏み切りました。

恩赦といっても、これからやる予定の仕事が免除されたわけではないから、せいぜい、夕食の時間に家に帰って、家族と食卓を囲み、今まで舍房のパソコンでこなしていた夜の部の訳業を、自宅のワープロでやるようになった

ただけのこと。効率が落ちるぶん、一日の仕事量が減り、心なしか労役の負担が軽くなったように思えるような気がするという、なんとも情けない進歩（後退か？）ではある。

それでも、舎房での約十時間のお勤めを終えて、暮れなずむ風景のなかを自転車帰宅するというのは、なんかこう、感動的な場面ですねえ。街並みが「至福」の色を帯びているようにさえ見える。

久々にこんな思いを味わってみると、舎房でひとり晩飯↓すぐにまた仕事↓夜十時ごろ帰宅↓寝酒を飲みながら仕事↓スイッチを切るように就寝↓起きたら朝飯↓ただちに出勤、というあのモードには、絶対に戻りたくないと思う。もう歳だしねえ。

と、ささやかながら貴重な労務状況の改善が行なわれたらちょうどそのころ、件の分厚い上下本が、日本翻訳××賞という、なんだかいかめしい名前の賞を受賞してしまった。

知らせを聞いた瞬間、ふたつのキーワードが元凶人の胸を突き交った。「金」と「服」。そう、いくらいただけるのかという疑問と、授賞式にきていく服がないという懸念。いや、貧しさは品性を駆逐するのである。

ほんとうに面目ない話で、しかし、貧乏人の金銭的思考はすばやい。たちまち、「賞金で服を買えばいい」という結論が導き出された。

べつにダイヤモンドをちりばめた十八金のスーツを仕立てようというんじゃないから、足が出ることはないだろう。といっても、賞金の額がわからないことには……。

だけど、品性を欠く割に奥ゆかしいわたしは、そのシンプルな問いを口に出せない。向こうも言ってくれない。結局、不明のまま電話が終わってしまった。おお、こんな残酷な宙ぶらりん状態のなかに、想像力たくましい貧乏訳者を放置しないでくれえ！

まあ、一千万ってことはないだろう。いいとこ、百万だよな。いや、いや、翻訳というマイナーな世界の賞だから、五十万か。もしかして、三十万？ 二十万？ ええい、もうひと声、十万だ、十万。さあ、持ってけ、泥棒！（以上、奥ゆかしいので単位は省略）

翌々日、今度は版元からの電話。「詳しい案内が届いたので、お知らせします」お待ちしておりましたです。

「授賞式が、○月×日△時より、☆☆会館」はい、はい。

「賞金が——」
ごっくん（生つば約百八〇〇〇）。
「ええと、ありませんね」

何？ なんとおっしゃいました？
「賞金なし。盾と賞状がもらえます」
賞金なし、ね。なして、いくらだったけ？

うくん、なんちゅうか、その……つまり、清く正しい賞だということですね。わたしみたいな俗人にはもったいないような（涙）。

真相を知った瞬間、ふたつの等式が元凶人の胸を突き交った。

「謝金」——「謝金」——「謝金」

すなわち、賞金から賞を差し引くと、お金が残る。逆に、賞から賞金を除くと、懐具合がマイナスになっちゃうのである。授賞式に出かけるにも、交通費つてものがかかりますしね。スーツの新調なんて、とんでもない。

しかし、捨てる紙あれば再生紙あり。切り換えが早いのも、また貧乏人の特性でござんす。わたし、賞金などという不労所得に欲をふくらませた自分を強く恥じて、堅実に、競馬に夢を託すことにしました。

恩赦のほんわか気分が臨んだ秋のGI緒戦、秋華賞——。いやあ、興奮したなあ。エリモシツク軸の千円ずつ五点ながしで、生まれてはじめての万馬券を取ったんです。

そんなこんなで、浮き沈みの激しい一カ月だった（ほんとは、もっと大きい環境の変化があったのだが、それはまた次回）。それにしても、出所祝いと賞金を自力で稼ぎ出すなんて、わたしの貧乏にも、いよいよ筋金が入ってきたということか。